

Title	法隆寺金堂本尊について
Sub Title	Principal Holy-Statute (本尊) in the Golden Hall ( 金堂) of the Horyu-Ji
Author	小川, 伸之(Ogawa, Nobuyuki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.1/2 (1970. 5) ,p.103- 119
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	今宮新先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700500-0107">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700500-0107</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 法隆寺金堂本尊について

小川伸之

- 一、金堂釈迦三尊の光背銘
- 二、法隆寺の被災と釈迦三尊
- 三、法隆寺の再建と太子信仰

はし が き

法隆寺は明治以来、おそらく最も多くのひとたちによって問題にとりあげられてきた寺であろう。にもかかわらず、最近でも相変わらず「謎を秘めた寺」などという言葉がさかんに使われている。実際、法隆寺はいまだにわからないことだらけ、というより、まだ何も定かには解明されていないというべきであろう。そのことが、法隆寺だけの問題であるならば、などを秘めた寺のままでもよいかも知れないが、いまやあらたに究明のすすめられつつある七世紀前半の古代史にとって、いわんや古代仏教史の考察にとって大きな障壁になっている点をあげなければならない。その壁を、何らかの方向に少しでも破ってみたい気持ちから、私もここに法隆寺問題の一二をとりあげてみようと思うのである。

## 一、金堂釈迦三尊の光背銘

法隆寺の金堂に参詣すると、ある奇妙な安らぎの気持をおぼえると多くのひとが書かれている。しかし私は、あの金堂に入るとどうも不安定な気持をおさえきれないのである。それは第一にあのお堂と仏像群との調和の問題であるのだが、それは所詮主観の問題でもあり、またいささか私の専門域外のことでもあるが、さらには、あの一一つの本尊たちがそれぞれ不明瞭なかけを持ちすぎることが、どうしても気にかかってくるのである。

東の間に安置される薬師如来像については、その光背銘から、これこそがかって法隆寺の本尊であったとながらく説かれてきた。しかしその後、この光背銘には強い疑問が提出され、<sup>(1)</sup>薬師仏の造像由来については疑いがもたれるようになってきた。そこで特に問題にされた「天皇」とか「東宮聖王」とかの用語については、推古朝にすでに天皇などの語が使われていてもさしつかえないといった反論も出され、むしろその意見が大方に通っているようであるが、<sup>(2)</sup>こんどは美術史家の側から、薬師像そのものについて、これを推古朝初頭頃のものとするに反対の意見が出されてきた。それは金堂の釈迦三尊仏との対比に於いて、止利様式としてのその様式が釈迦仏よりも古いものとは考えられないこと、また鑄造技術が釈迦仏よりもはるかに優れていると考えられること、などによるのである。そこで現今では、この薬師如来像は大化以後の、止利様式の最末期の作品であるとか、あるいは法隆寺再建以後における擬古的作品であるとか、概ねそのあたりに議論は定着化しつつあるようである。<sup>(3)</sup>かくして、薬師仏光背銘の詮索はすでに無用のこととなったわけであるが、とにかく銘文の伝える内容は事実とは異っている点を指摘しておかなければならない。<sup>(4)</sup>

さてそれでは、中央の釈迦三尊仏はどうであろうか。これについてもやはり福山敏男氏や藪田嘉一郎氏などから、その光背銘の可信性について否定的な意見が出されていた。<sup>(5)</sup>また近くは岡田芳朗氏が、その銘文中における人名記載や日付記

載法の混乱・不統一性をあげて「天武朝頃と推定することが妥当であろう」と述べられている<sup>(6)</sup>。しかしこうした否定的な意見は美術史家にはあまり受け入れられず、釈迦三尊は像そのものも古く、銘文も特に重大な支障がないから信じるべきであるというのが今日でも大勢のようである。そこで金堂内に安置される諸尊については、西の阿弥陀仏は鎌倉時代の作であるから論外として、東と中の中の本尊については、薬師仏は疑わしく、釈迦仏は信賴すべしということに大体なっている。ところが、そう結論すると、そこにまた一つ厄介な問題がおこってくるのである。銘文によれば、釈迦三尊は厩戸王没後の作であり、薬師仏はずっと後の作である。それでは、当然存在したであろう厩戸王生前の若草寺院——発掘によって確認されたいわゆる若草伽藍、以後若草寺院と仮称しておく——の本尊は一体どうなってしまったのかということである<sup>(7)</sup>。この謎に対して、町田甲一氏が一つの新しい解釈を提出された<sup>(8)</sup>。

釈迦三尊像の光背裏面に刻銘されている造像記の可信性については、少数の人がこれに疑いをよせているが、大方の人はその鑄刻の年時が銘文中に記されている造像時、すなわち推古三十一年より多少降ることがあるとしても、聖徳太子夫妻の発病、逝去、像の完成時および作者が止利仏師であるという点などについては、積極的にこれを疑う必要はないという態度をとっている。……

ところで金堂本尊の釈迦三尊像はその銘文によれば、発願から僅か一年一ヶ月ほどで完成されている。勿論、その可能性が全くないという訳ではないが、これに先立つ元興寺（法興寺）の本尊や、文献に明徴を求め得る鑄造仏の場合を参照すると、それらはすべて着工から完成まで、かなりの年数を要している。……

最近、法隆寺に同道願って、実地に調査を共にした鑄金家の香取正彦氏の御示教によれば……発願から（鑄造開始でなく）僅か一年ほどの短期間で、この像を完成することは難しいだろうということである。……  
本尊の製作開始は、同じ作者の止利が、元興寺の本尊を完成した推古十七年（『元興寺縁起』の伝えるところを採る）よ

りも後で、太子夫妻の発病の推古三十年以前ということになるから、推古二十年代を考えておくのが隠当であろう。ただ、その完成を前にして太子夫妻の発病があり、逝去があったので、太子夫妻の「軫病延寿、安住世間」「往登浄土、早昇妙果」を祈って製作がつづけられ、完成の折に、そのような願意を盛った現銘文が刻まれたのであろうと思われる。

かなり長文にわたったが、町田氏の論旨の要点を抜書した。そして氏は右の論点を一つの根拠として、法隆寺が推古十四—十五年頃に太子によって創建されたものと推測されている。町田氏は釈迦仏光背の銘文を全面的に否定されるのではない。ただ専門的見地から、銘文が伝える如く、発願から完成まで一年余ということが不可能であることを指摘され、そこでおこってくる銘文内容の疑点について、なお銘文の意を生かしながら氏独自の解釈を試みられたのであった。町田氏はあえて試論と称されているが、従来、謎にのみつまれていっこうに進展をみなかった経緯を考えれば、その提案は積極的に評価されるべきものと思うのである。

ところでこの釈迦光背銘について、私は次のように考えている。この釈迦仏の銘文自体すべて真実を語ってはいないことがはっきりしてきた。またお隣の薬師仏の銘文にいたっては大いに疑問の存するものである。こう考えるならば、釈迦仏の銘文についても、それは大方信じてよいとするよりも、全面的に疑ってかかる方が常識的ではなからうか。なお、鎌倉時代の作であるから特にここであげる必要はないのだが、西の間の本尊である阿弥陀如来像の光背銘についても、おかしな点がすでに指摘せられている。<sup>(9)</sup> その銘によれば、従前ここに安置されていた阿弥陀三尊が承徳年中(十一世紀末)に盗難にあったので、寛喜三年から貞永元年(十三世紀初)にかけてこの像が作成されたとしている。ところが盗難当時の記事をふくむ「金堂日記」には何らその阿弥陀仏のことは記されておらず、そこには別の小仏像群が置かれていたようであり、さかのぼって奈良時代天平年間の「法隆寺資財帳」にも、金堂に阿弥陀仏があったことは録されていないのであ

る。これまた法隆寺の怪の一つであるが、要するに、金堂本尊群の光背銘はどれも疑問だらけと云わざるを得ないのである。

金堂本尊釈迦三尊光背銘の内容について、私は次の諸点に特に疑問をいただいている。

(一) まず第一には、この銘文の文体、書体ともにまことに堂々としていることである。その点は薬師仏銘文も、一見、その文体などはかなり異った印象を受けるけれども、なかなか立派な出来ばえである。傍証とすべきものが甚だ希少であつて、十分に比較論証することは不可能であるけれども、しかし戊子年銘の釈迦仏光背銘（法隆寺蔵）・丙寅年銘の弥勒菩薩台座銘・同じく辛亥年銘の観音菩薩銘（いずれも法隆寺旧蔵・現東京国立博物館蔵）・或は法隆寺金堂四天仏の銘文などと比較した場合、<sup>(10)</sup> 釈迦三尊銘はその書体・文体ともいかにも天平的洗練さをさえ感じさせるのである。特にその願文の書き方などは、前引諸仏の銘を通り越して、天平期製作の写経の願文と全くおなじ感覚であると云えよう。

(二) この銘文の書き出しに、法興元卅一年歳次辛巳十二月、とある。この歳次・・という日付記載法について、従来は、この記載法が推古朝頃までさかのぼっても差支えないという考え方が支配的であつたようであるが、やはり問題にすべきであると思う。法隆寺旧蔵・弥勒菩薩台座銘に、「歳次丙寅年正月生十八日記」とある。<sup>(11)</sup> これについても従来は、丙寅年を推古十四年にあてて考える人が多かったが、近年ではその菩薩像の様式や鑄造技術の面から七世紀後半に下げべきだとし、<sup>(12)</sup> 推古十四年より干支一巡を下げた天智五年にあてるようになってきた。次に法隆寺金堂の薬師如来光背銘に「歳次丙午年」とあるが、前述の如く、その造像自体が大化以後のものとしてきてきている。今日、この釈迦仏銘を別にして、確実に大化前代にさかのぼれるものは、隅田八幡宮蔵鏡銘と法隆寺所蔵の為嗽加大臣と書かれている釈迦三尊仏光背銘のみであり、それぞれ「癸未年」・「戊子年」（推古三十六年）と記されている。なお大化後に下つても、辛亥年（白雉二年・法隆寺旧蔵観音菩薩銘）・戊午年（齐明四年・観心寺蔵阿弥陀仏銘）・丙寅年（天智五年・野中寺蔵弥勒菩薩銘）の如き表記法

が一般的であり、歳次・年という日付表記法は近江朝ないし浄御原朝頃からぼつぼつ出てくるように思われる。ひとり金堂本尊釈迦仏の銘文のみを推古朝のものとして認めるのは無理ではなからうか。

なお釈日本紀所載の伊予温湯碑及び法王帝説所載の天寿国繡帳銘にそれぞれ「法興六年歳在丙辰」（推古四年）・「歳在辛巳十二月廿一日癸酉」（推古二十九年）と記されている。この歳在・の表記法の方が古くにおこなわれていたのではないかと考えられているが、しかしこの二点については、前者には文体・用字法など多くの点に疑問があつて、ずっと後の回想文であろうとすでに<sup>(13)</sup>されており、天寿国繡帳銘については、法王帝説載せる所の全文を推古朝のものとする<sup>(13)</sup>ことはとうてい出来ないものと私は考えている。いま一つ、元興寺伽藍縁起并流記資財帳所載の丈六光銘の中に、「（推古）十三年歳次乙丑四月八日戊辰」とあるが、この丈六光銘については一部のみ原銘が引用されているものであり、その原銘引用と思われる所も奈良時代の成立であろうと考えられている<sup>(14)</sup>。

なお銘文中の別の箇所にも、二月廿一日癸酉なる日付記載があるが、さきに引用した岡田芳朗氏の論考に、月の干支を記すことは天智朝以後の金石文にのみ見られ、それを半世紀さかのぼらせることは無理ではないかとされているが、関連して大いに参考とすべき意見であると思う。

(三) この銘文中に、「上宮法皇枕病」・「翌日法皇登還」なる言葉が出てくる。薬師銘文に「東宮聖王」の語がある。また伊予温湯碑には「法王大王」と記されている。しかしすでに述べた如く、最近では両者ともに後代のものと考えられており、また推古朝時代にすでに厩戸王に対してこうした尊称が使用されていたとは考えられないとするのが大方の意見である。はたしてひとり「法皇」の語のみは是認されうるものであろうか。推古朝頃における天皇の語の使用についても、前引の門脇氏の考察によれば、特殊の場合の用語としてその使用の可能性が一応考えられる、というにすぎない。法皇の語は、天皇という語以上に当時使用の可能性は考えられないのではなからうか。確たる反証が存在しないということと黙認

されてよい語ではないと私は考えるのである。なお法王帝説には「聖徳王」「法主王」「聖徳法王」などの語が見え、補闕記には「大法皇」なる呼称が記されてお<sup>15)</sup>り、また書紀用明紀にも「法大王」「法主王」などの註書きがあるが、いずれにしてもみな奈良朝に入ってから書かれたものであり、釈迦銘の法皇の語を助ける傍証とはなり難い。要するにこれら一連の呼称は、法隆寺再建時代頃、その系統の仏僧たちによって、上宮王家への追懐の中で作られてきたものであろう。

(四) 書紀は厩戸王の死去を推古二十九年二月五日の半夜とする。ところが釈迦銘文は王の死去を辛巳年(二十九年)の翌年(推古三十年)二月二十二日としている。法王帝説所載の天寿国繡帳銘もやはり辛巳年の明年(推古三十年)二月二十二日夜半としている。この相異なる両説については、今日では、書紀の方があやまりであろうとするのが学界の大勢である<sup>17)</sup>。私はここでそのどちらが正しいのかを問題にするつもりはない。ただ、書紀編纂者がなぜ三十年死去説をとらなかったのかが気になるのである。天平十九年の資財帳では、法隆寺僧は金塗銅釈迦像志具の後に「右奉為上宮聖徳法王、癸未年三月、王后敬造而請坐者」と明記している。こうした法隆寺僧の態度から考えて、もしも書紀編纂時代にこの銘文が造像時のものとして伝わっていたならば、そのことはすでに世に知られていたと思われるし、あれほど厩戸王に大きな比重を与えている書紀編纂者が、全くその説を無視していることは不可解に思われるのである。私は書紀説が正しいと思っ<sup>16)</sup>ているのではない。ただ書紀編纂当時、釈迦仏銘や天寿国繡帳銘がまだ存在しなかったか、或は存在したとするならば、書紀編纂者から敢て無視される何らかの事情があったのではないかと思うのである。なお銘文と書紀とではその死去の日も異っており、従って、書紀編纂者が単に記録を一年読み誤ったとは考えられない。

以上、釈迦三尊光背銘についていくつかの疑点をあげてきたが、要するに、この銘文は藪田氏などの云われる通り、天平頃に創作され追刻されたものであろうと思うのである。



## 二、法隆寺の被災と釈迦三尊

釈迦三尊の光背銘は天平頃に創作されたものであるとしても、そのことは、釈迦三尊仏そのものとはかかわりの無いことである。この三尊仏が推古朝頃のものであり、おそらく飛鳥寺の丈六仏より少し後頃の止利派の作品であろうということについては、概ね専門家の一致した見解である。

さて一方法隆寺という寺がいつ創建されたものなのかは、これまた難しい問題であるが、その法隆寺は、その後、雷火の災にあって焼失し、今日の法隆寺は再建されたものであることは、石田氏の若草伽藍址発掘以来、どうやら広く確認されるようになった。その焼失や再建がいつのことであったのか、これまたいくつもの意見が対立し、依然として一致をみないでいるが、そのことは今しばらく措くとして、書紀天智九年四月三十日の条に、「夜半之後、災法隆寺。一屋無余。大雨雷震。」と記されている。法隆寺が一屋も余さず被災したことについては、太子伝補闕記に「斑鳩寺被災之後。衆人不得定寺地。……」と記されていることから傍証されるものと考えられている。そこにまた一つの問題がおこってくるのである。

本尊の釈迦仏は飛鳥時代の創造仏である。いわゆる若草寺院は、その後、雷雨の為に一屋も余すところなく焼失し、今日の金堂は後の再建である。ところが金堂内の諸仏は全く火を受けていないのである。あのいたましい飛鳥寺の本尊の姿とはまことに対照的に、法隆寺本尊は飛鳥の瑞麗な姿を今日に保持している。それでは雷雨の中で諸堂が炎上していった際に、この本尊はどうやって無傷で生き残ったのであろうか、この疑問について、いままで私は納得のいく説明に全く接しなかった。ところがこの点についても、近年、町田甲一氏が注目すべき見解を示されている。<sup>(18)</sup>

まず金堂の隣の塔に落雷し、塔の炎上中にこの三尊を救出すべく最初に像と光背をとめている柄<sup>サ</sup>をはずし、光背を像の

背後に落とし本尊を救出したのであろう。その際大光背はあおむけに一回転して先端から落ち、みずからの重量で先端を前方へ折りまげて損傷した——もちろんその折頂上の透かし彫りの宝塔部も、破損しました光背周縁の何体かの飛天をもそこなったものであろう。しかし幸いに光背そのものは火中に帰することなく、金堂への延焼前に救出することが出来たのではなからうか。大光背をつけたままこの三尊を救出することは、火急の場合、全く不可能である。

これは法隆寺の被災と金堂の本尊仏との関係についての、なるほど確かに納得のできる説明であると思う。雷雨による被災なのであるから、おそらく最初に落雷・出火したのは五重塔であらう。そうすれば、それが金堂に延焼するまでにはある程度の時間があつたと思われる。そこで右の如き手続きをふめば、確かに本尊仏を続いて光背をも無傷で救出することは可能であつたと考えられる。ただし、一応その可能性が考えられるのであって、本当にそうであるためには、そこになり冷静な判断力と、行動力とをあわせ持った僧が存在し、しかも本尊と光背を結んでいる柄をはずして光背をいったん背後に落とせばよいというような、かなり専門的な考え方のできる人物の存在をも必要とすることである。たとえば、五重塔が出火した段階で、その火が金堂に延焼する可能性をいち早く察知し、ただちに金堂本尊を雷雨中に搬出するべく指揮をとるには、かなりの判断力・決断力・行動力そして高度の専門的知識をあわせ持った高僧が存在しなければならぬ。つまりその可能性は、一応論理的には存在するが、実際には、その可能性はかなり困難なことであると云わなければならない。

私は、この釈迦三尊仏は、法隆寺再建以後に、飛鳥の何所か他の寺から移されたものと考えの方が順当ではないかと思うのである。そのことを直接に証するような史料は全く存在しない。再建後移座ということは、いわば全くの推測にすぎない。しかしいくらかの、そのことを傍証するものは存在すると考えるのである。それは法隆寺に多数残されている飛鳥仏の存在である。こんな数多くの仏像が、一屋も残さなかつた雷火の中で、救出し得たとはまず考えられない。げんにそ

の中には、天平十九年の資財帳にもまだ記載されていないものがかなりに存している。いくつかを例示してみよう。

金堂の四天王。これはその銘によって大化頃の製作が大体まちがいないと考えられているものである。この四天王も天平十九年の資財帳には載っていないが、それについては、十九年の資財帳には天部の記載が全く無いので、すでに存在しているも載せられなかったのではないかという考え方もあるようである。法隆寺被災について皇極二年説をとり、資財帳が記す大化三年の食封の施入を信じ、<sup>(19)</sup>大化後ただちに法隆寺の再建が着手されたと考えれば、四天王たちも丁度その再建事業の中で造られたと云い得るが、現存伽藍は天武朝以後和銅にかけて再建されたと考えるのが今日の大勢となっている。やはりこの四天王像も他より移入されたものと考えるのが穏当ではないだろうか。

東院夢殿本尊の救世観音。この像が立派な飛鳥仏であることにはまず問題はないであろう。而して天平宝字五年の東院資財帳に「上宮王等身」と記されているものである。しかし天平年間に東院が再興されるまでのこの像の由来については全く不明であり、その保存状態の良好さからも、雨中に救出されてどこかに永年置かれていたと考えるより、やはりどこか他の寺に安置されてあったと考えるべきであろう。この像に接して、上宮王家の無念の思いや悲願を感じとったり、或は太子の体温を感じとったりすることは、それは文学者の全く創造的自由であるが、歴史的には全く根拠のない寺伝にすぎない。

金堂東間の薬師如来。この像については本尊の釈迦三尊とともに資財帳に明記されている。しかしその光背銘については、前にも述べた如く、今日では真実を伝えるものとは考えられていない。その鑄造技術からいって、本尊釈迦三尊よりはかなり後のものとされているが、しかしその様式などからみて、天平近くまで下げるべきではないように思われる。一部に、再建以後の擬古作とする意見もあるようだが、それはこの像があくまでも法隆寺のために造られたものと考えからであって、そのことに固執しなければ、もっと造像年代を大化あたりまで上げる方が穏当ではないか。そしてやはり

他の寺にあったのであり、再建以後に移入されたものとするのが自然のように思うのである。

以上の他にも、まだまだ法隆寺は多くの飛鳥・白鳳仏を今日にまで伝えてきている。たとえば、大宝蔵殿に蔵する戊子年銘の嗽加大臣の為に造られた釈迦三尊などもそうである。現今、もっとも古い光背銘を持つ釈迦仏である。法隆寺も、ソガ系につらなる寺院の一つという観点にたてば、ソガ大臣の為に造られた仏像が創建時の法隆寺にあってもおかしくないし、またこの規模のものなら火災中に救出することも不可能事ではない。案外この仏像あたりが、被災以前の法隆寺から伝えられたものであったかも知れないが、その来歴は今のところ何とも不明と云わざるを得ない。

平城京遷都以前、飛鳥の地には数多くの寺が、伽藍の偉容をきそつていた<sup>(20)</sup>。当然そこには大量の仏像群が存在していたに違いない。たとえば、飛鳥寺にしても、今日安居院に残る丈六仏だけしか無かつたわけでは無論あるまい。むしろその寺にこそ、飛鳥時代の代表的な仏像が数多く安置されていたに違いないのである。ところが都の平城京移遷後、とりわけ更に平安京移遷後、飛鳥の故地の寺々はいっついで勢を失い荒廃していった。その際に、飛鳥にあった数多くの仏像群はどうなってしまったのであろうか。そのことは今日ほとんど解明されていないのであるが、少くともその中のかかりのものが、太子信仰の発展にともなうて少しも寺運の衰えなかつた法隆寺に吸収されたのではないかと考えられる。記録によつて明らかなものもある。かつてかなりの規模をほこつた橘寺の仏像の内、まとまつた数のものが藤原時代に法隆寺へ移されたことは、法隆寺側の記録にも記載されているところである。今日、東京国立博物館に所蔵される、いわゆる法隆寺旧蔵の御物四十八体仏といわれるものの大部分がそれにあたるものと考えられている<sup>(21)</sup>。どうやら法隆寺には、再建時代から中世へと、一貫して、飛鳥・白鳳時代の古仏を吸収してゆく意識的な伝統が存したように思われる。かの、多くの人々に親しまれている百済観音なども、そうした伝統の中で、中世になってからどこか飛鳥の古寺から移されてきたものであろう。なお白鳳仏の代表的名品とされるかの山田寺仏頭が——これは元来、飛鳥・山田寺の本尊仏であつた——、その威

にまかせて、平安末期飛鳥から興福寺に運ばれた例などもここで一つの参考になると思われる。

金堂の釈迦三尊仏にもどろう。この三尊仏の光背銘をたとえ全面的に信ずるとしても、それだけでこの仏像が法隆寺によって造られたものと断じることが出来ないと思うが、その銘文が後世に付託されたものとすれば、なおさらこの像も再建後に移入されたものとの疑いが深くなるのである。町田氏は前引の論考の中で、飛鳥寺の丈六仏が完成してまもなく、仏師止利は厩戸王のためのこの三尊像の製作にかかったのであろうとされているが、<sup>22)</sup>はたしてそうであったらうか。仏師止利は、飛鳥寺の仏像に関してはおの丈六仏だけ製作を命じられたのであろうか。当時飛鳥寺では、きわめて大規模な一連の造寺造仏事業がつづけられていたはずなのである。もっとも、上宮王家とソガ一族との緊密な関係や、飛鳥寺を別格とすれば、やはり若草寺院も当時としてはA級の規模の伽藍であったことなどを考慮すれば、止利がこの斑鳩の造寺事業にも関係させられた可能性も一応あったと考えられるが、一方飛鳥の地では、飛鳥寺ばかりではなく、豊浦寺・奥山久米寺・平群寺さらには葛木寺や巨勢寺等と諸寺の造営があいついでいたわけであり、それぞれにソガ大臣家とも関係の深いものも多く、止利一派の工房もかなり忙しかつたことと思われるのである。と云って私は、金堂釈迦三尊が止利派の作品であることを疑うつもりはない。それは専門家の指摘される通り止利派の作品であらう。だからこそ、それが斑鳩の寺の本尊として造られたとするより、飛鳥のどこかの寺の本尊仏であった可能性を考えてみたいのである。

このような考えは実は目新しいものではない。いままでにもそのような疑いは一部に持たれていたものである。そして所詮、今の段階では確証をとまわらない試論にすぎない。それをここにあらためて提言したのは、法隆寺に数多く伝えられてきた飛鳥・白鳳期の仏像群を、法隆寺や、「聖徳太子」からすこし解放して考えてみるのが、今後の研究の前進に必要なことだと思ったからである。

### 三、法隆寺の再建と太子信仰

法隆寺の被災については、書紀天智九年（庚午年）四月三十日夜半の記事を信用するのが今日の大勢のようであるが、しかしなお近年にも宮地氏の推古十八年説<sup>(23)</sup>や、伊野部氏の皇極二年説<sup>(24)</sup>などが出ている。伊野部氏は更に本年度にその自説を補強される論考を発表されている。<sup>(25)</sup>推古十八年説はしばらく措くとして、伊野部氏は、補欠記末尾の「斑鳩寺被災之後……」の文章を上宮王家滅亡の文に直接つながるものとして、皇極焼失説をあらためて強く主張された。私はこの問題について特別の私見を持ちあわせていないのであるが、大局的に考えてやはり天智九年説に同調したい気持が強い。補欠記自身が、別の箇所庚午年四月三十日の被災を記しており——補欠記はそれを書紀より干支一巡あげた推古十八年としているわけであるが——また「斑鳩寺被災之後」にはじまる末尾の文章にはいささか困乱が感じられ、それだけで書紀の記載をくつがえすだけの史料的价值を認めがたく思うこと、および天平十九年の同寺資財帳に浄御原朝以前の確かな証跡がほとんど認められないことなどによるものである。この問題については、若草伽藍址の考古学的調査、とりわけその被災地の残留磁気測定などによって近い将来に何らかの結論が得られるかも知れないが、私はその被災の年代より、今日の法隆寺伽藍がいつ再建されたものであるかがはるかに重要であると思っている。その再建時代については、福山敏男氏のように皇極二年焼失、その後まもなく金堂が再建され、二・三十年おくれて五重塔が建てられたとする説もあるが、<sup>(26)</sup>石田茂作氏・村田治郎氏・浅野清氏・町田甲一氏等の専門家の多くは、浄御原朝から和銅頃にかけての再建を考えられている。<sup>(27)</sup>天平十九年の資財帳によれば、大化三年に食封三百戸が施入されたことになっている。これについては、上宮王家の悲劇に対して改新政府の人々が深い同情を示したものと多くのひとが考えている。食封施入の真否はしばらく措くとして、蘇我入鹿の専横を憎み、上宮王家の悲劇へ同情する気持が当時の支配者たちの間に深くひろがっていたということは果し

て本当であろうか、私はかなり疑問に思うのである。記録の伝えるところによれば、上宮王家討伐軍には、輕王——皇極天皇の同母弟であり、改新政府でまず天皇になる人物——をはじめ、巨勢・大伴・中臣といった顔ぶれがそろっているのである。その本質はソガ一族の分裂現象に根ざすものであったかも知れぬが、<sup>28)</sup>さきの田村王との王位競望のときから、どうも山背王は支配者層の中で孤立化を深めていたように思われる。罪なくして害せられたということであるならば、古代においては、権力の周辺ではそのようなことはしばしばおこっていたことである。ひとり上宮王家だけが特に深い同情を持たれたのであろうか。とりわけ中大兄王・鎌足といった改新政府の中枢人物はどうか。彼等は上宮王家滅亡事件があつてはじめて権力へのチャンスをつかめたというべきであらう。ソガ系一族の内紛を大いに利用することが出来たのである。しかも権力を掌握して以後、考徳天皇の黙殺をはじめ、古人大兄・蘇我石川麿・有間皇子等をあいついで、それこそ罪なく謀殺してゆくのである。そして彼等は、その死期の近づいた晩年にはそれぞれ飛鳥寺への尊信の氣持を表わしている。彼等が法隆寺へ強い関心を示したということは、どうも記録上からもいっこうに感じられないのである。このへんはやはり後の太子信仰や上宮王家物語が、今日にまで影響を及ぼしていることを指摘せざるを得ないのである。

法隆寺への関心が明らかになってくるのはやはり浄御原朝になってからであらう。大海人王（天武も兄たちと大した違いはなかったであらうが、當時は、若草寺院が被災して再建に着手されつつあった時でもあり、また天皇家周辺には別の事情から聖徳太子や法隆寺への関心がおきはじめていたように考えられるのである。<sup>29)</sup>そしてその氣運に乗って、法隆寺は興隆への基礎をつくつたのであらうと思う。どうもそれまでは、若草寺院の規模のわりには、この寺が政府から重要視されてきたとは考えられないのである。

持統朝になると、法隆寺の重みがかなり増しつたことがうかがわれる。書紀持統六年閏五月三日に「詔令京師及四畿内、講説金光明經」と記されているが、このたびの講説には法隆寺もたしかに加えられていたことが天平十九年の資

財帳から知られるのである。<sup>(30)</sup>そしてこの頃には、正式なものではなく寺僧がそう自称したのであるが、とにかく「鵜大寺」というようないわれかたがある程度通用しはじめていたらしいことが、当時の金石文から知り得るのである。<sup>(31)</sup>

やがて都が平城京へ遷る頃からは、法隆寺の存在はきわだつたものになってくる。今日の西院伽藍の主要部分もその偉容を整え、また聖徳太子への追慕の思想がはっきりと形成されてくることなど、多くの先学によってすでに説かれてきていることである。斑鳩では寺僧たちによって、上宮王物語の創作がいつそう進められていたであろうが、ここで特にその存在が注目されるのが橘三千代であることを町田氏は前引の「法隆寺」に於いて指摘せられた。今日法隆寺に伝えられる橘夫人念持仏及び厨子が果して本当に三千代の所持品であったかどうかはわからないが、その娘や孫たちの法隆寺への深い関心は、やはり母・三千代によってはぐくまれたものであろう。天平の初年代には光明皇后によって法隆寺への度々の施入がおこなわれており、天平十年代には正三位橘夫人（橘佐為の娘・古那可智と考えられる）が東院の再興へ少なからぬ肩入れをしていることが、天平十九年及び天平宝字五年の資財帳によってうかがわれる。そしてこの三千代につらなる女系の人々を介して聖武天皇も、またはっきりした証跡はないがおそらく藤原氏や橘氏の一族も、法隆寺への関心を深められたのではなからうか。法隆寺はまことに強力な支持者を得たものである。なお天平宝字五年の資財帳を見ると、そこにおびただしい数の「上宮聖徳法皇」の御持物なるものが録されている。そこに当時に於ける聖徳太子信仰の進展がよく示されているとともに、当時の法隆寺側の聖徳太子への、或は飛鳥の薫りへの執着をもよく物語っているものと云えよう。しかしこの寺家側の、飛鳥の薫りへの執着が、今日、古代美術の宝庫としての斑鳩の里を我々に残してくれる力になったものでもあった。

（昭和四十四年九月）

#### 註

十三冊）、藪田嘉一郎氏「上代金石叢考」。

（1）福山敏男氏「法隆寺の金石文に関する二・三の問題」（夢殿

（2）「天皇」という用語については、最近、門脇徳二氏が詳細



な考察をおこなわれた(同氏著「大化改新論」一一七ページ)。そして氏は、きわめて特殊な場合の可能性を除いては、推古朝頃における「天皇」の用語に否定的な結論を示されている。

- (3) 町田甲一氏が角川新書の一冊として出された「法隆寺」は最近の法隆寺についての最良の案内書である。同書六〇ページ参照。

- (4) 「天皇」の用語の問題を別にしても、この薬師仏の銘文には多くの問題点が存することについては、町田甲一氏「法隆寺の草創ならびに金堂本尊の製作年時について(試論)」(日本歴史二二七号)にその要点があげられている。

- (5) 註(1)参照。

- (6) 岡田芳朗氏「法隆寺再建・非再建論争」(共著「日本古代史の諸問題」所収・九四ページ)。

- (7) 久野建氏「法隆寺の創建」「法隆寺の美術」(小学館版・原色日本の美術・2・「法隆寺」所収)

- (8) 町田氏、前掲稿。

- (9) 町田氏・前掲「法隆寺」一九一ページ、久野氏・前掲「法隆寺の美術」一七九ページ

- (10) いずれも「古京遺文」所載図版による。

- (11) 竹内理三氏編「寧楽遺文」・下巻。

- (12) 前掲・小学館版・「法隆寺」図版解説二二二ページ。

- (13) 宮田俊彦氏「推古朝の金石文(下)」(歴史教育八一五)。

- (14) 宮田俊彦氏・同前。

- (15) 太子伝歴には「大法王皇太子」とある。或は法皇の語はそれを略しているものかもしれないが、皇太子という語の成立にはまた大いに問題のあるところである。(門脇氏・前掲書——註(2)参照)。

- (16) 厩戸王の数多くの呼称については家永三郎氏「聖徳太子御名号考」(「上代仏教思想史研究」所収)に詳説されている。

- (17) 岩波版・日本古典文学大系「日本書紀・下」の頭註、二〇四ページ参照。

- (18) 町田氏・前掲「法隆寺」五八ページ。

- (19) 天平十九年の法隆寺伽藍縁起并流起資財帳が、史料としてはかなり注意を要するものであることについては、前掲・岡田芳朗氏「法隆寺再建・非再建論争」八六ページ参照。

- (20) 石田茂作氏「飛鳥時代寺院史の研究」・「仏教の初期文化」

- (旧版・岩波講座・日本歴史)、福山敏男氏「日本建築史研究」。

- (21) 橘寺に関しては福山敏男氏「橘寺の創立とその伽藍配置」(前掲・「日本建築史研究」所収)。

- (22) 町田氏・前掲「法隆寺の草創ならびに金堂本尊の製作年代について(試論)」。

- (23) 宮地廓慧氏「法隆寺皇極焼失説について」(仏教史学一〇一四)。

- (24) 伊野部重一郎氏「補欠記を通じて見た法隆寺問題の検討」(日本仏教七号)。

- (25) 同氏「法隆寺被災年代と補欠記」(日本歴史二五二号)。

- (26) 福山氏「法隆寺の創立」(前掲「日本建築史研究」所収)。  
(27) 石田氏「法隆寺再建の年代推定」(「法隆寺雑記帳」所収)。  
(28) 門脇氏・前掲「大化改新論」参照。  
(29) 拙稿・「飛鳥仏教の再検討」(史学三六一二・三号)。  
(30) 町田氏・前掲「法隆寺」九七ページ。  
(31) 法隆寺蔵・甲午年銘(持統八年)・観世音菩薩造像記(寧楽遺文・下巻・九六五ページ)。